

夜間大学生の頃

～その1～

土橋 重治

和歌山市に夜間大学開設

中学校三年生となる昭和二十八年(1953年)五月三十日、和歌山県知事小野真次、和歌山市長高垣善一が正副会長とする「和歌山大学経済短期大学設置期成会」が文部省へ次のような設立趣意書を出した。

「多数の有能にして熱心なる勤労青年の向学心を満足せしめるため：地元希望があり、有力な和歌山大学が存在する。これを全面的に利用し、夜間教育に必要な多少の設備を附加すれば夜間大学の開設は決して困難ではない」

この趣意書が出される以前、夜間大学の設置を強く要望して、数年にわたる熱心な運動を展開してきたのは私たちの先輩である桐蔭高校定時制生徒会と卒業生であった。

専任教官であった殿井一郎教授

の回顧にも「開設以前から桐蔭高校定時制の生徒を中心に熱心な要望があった」(和歌山大学経済短期大学部、閉学記念誌「四十一年の歩み」平成六年十月一日刊による。以下の記述の資料・数字等も同誌を参考とした)

これを県下の各高等学校、県、市それに企業のバックアップもあって、昭和二十九年四月一日に創設されたのである。

私が桐蔭高校定時制に入学した正にその日である。「自分でも大卒へ行ける」という一点の光明が見えた瞬間である。

入学願書の提出

願書には公立の病院、もしくは保健所の発行する診断書が必要だった。昭和三十三年二月十九日の日記に保健所へ診断書を受け取りに行った日のことが書いてあ

る。

この日の朝、御坊通信局から「南海バスストライキ」の原稿が東和歌山駅に届くと電話が入った。支局長と本社とのやりとりを聞いていて(本紙には使わないのだ、地方版なら急がなくともよい)と勝手に判断して午前十時に支局を出た。

駅で原稿を受け取った足で、駅近くの保健所へ診断書を受け取りに行った。三番の窓口へ向け、二番へ五番へとたらい回しの対応で時間がかかってしまった。

支局へ着くと十一時二十分であった。仕事中一時間も私用で費やしていた。夕刊二版は十一時半が締め切りであることはよく知っていた。「二版に間にあわん」と支局長にひどく叱責された。急いで暗室に飛び込んで現像した。三版には間にあった。